

空

平成30年5月31日発行

第16巻2号

通巻第78号



2018・4・5

SORA 78号

金鳳華

柴田 佐知子

影放りだして散りたる雀の子

いつ見ても笑まふ田の神水ぬるむ

骨格を確かに山の畑を打つ

ひとつ灯に家族の夕餉春の雪

涅槃図を抜け出て夜の山荒す

何着ても赤子の色に百千鳥

一頭の牛に手こずる春まつり

農場を柵が遠巻き鳥の恋

村を子が出でゆく春となりにけり

大陸の仏を守る梅の里

墳三基裾をひとつに揚雲雀

囀の光をまとふ王の墳

石室はとうに空つぽ金鳳華

春風やかくも小さき王の墳

福岡 高倉 和子

がらんどうの青空ありて枯野原

掃き寄せて畑の隅の焚火かな

腑に落ちぬ恋の末路や狐火消ゆ

能面の鈍き光や寒波くる

無理難題押しつけらるる牡丹鍋

凍滝のあたりは風の音ばかり

膝折りて話したきこと冬の夜

白波の渦となりゆく寒さかな

東京 中田 みなみ

返り花数ほどほどに目立ちけり

人恋ひの灯の散る冬の別荘地

梟に夜通し点灯す作家かな

ボロ市や押されて風の躓ける

小春日を溜めて露人の琥珀壳

ボロ市や掌にのせて買ふ七福神

ボロ市や人に揉れて浮世好き

フォークダンスの昂り手袋に仕舞ふ

福岡 柴川志津子

熊崎 荒井千佐代

如月や天地をつなぐ大銀杏

海苔簾を見廻つてゐる日和かな

胸までの長靴干して白魚川

消防士戻り見上ぐる燕の巢

葉桜やもう届かざる葉箱

竹槍を持たせられし蕎麦の花

訪へばまづ牛が貌出す花蜜柑

ぎしぎしの花より低き王の塚

俳句の師岳石神父召さる

冬や吾を生かしてくれし神父逝く

磔像の真下に棺冬ぬくし

絵硝子を抜けし冬日が白壁に

大司教よりの献花や冬蝶も

出棺のあとの浦上しぐれ虹

散り急ぐ紅葉や茶毘に付する間も

大根の三畝を遺し神父逝く

身の裡に断崖のあり雪しんしん

埼玉服部早苗

福岡岸洋子

草間彌生のかぼちやのごとき日向ぼこ

初御空大きな門を潜りけり

霜晴やホットミルクと甘食と

石段の数知つてをり初詣

頭痛薬買ひ足しに出る街師走

巫女ひとり神主ひとり初霞

無頼めく鯛焼の餡はみ出るは

初晴の神酒に酔ひけり歩きけり

若水や亀の子束子新しく

祈り終へし手の集まれる大焚火

黒豆のなかの草石蚕を姫と思ふ

戎笹真つ直に立て乗り合はす

薺打つ音のルフラン樂しめり

買初の自販機のお茶手に包む

伝空海筆いろはうた日脚伸ぶ

まだ母の齢に遠し薺粥

北九州

深川 淑枝

煤逃げや骨を見に來し博物館

恐竜の化石ざらりと山眠る

アンモナイト寒き波音まとひをり

縄文の骨の筭笄返る

子を宿す形の土偶冬銀河

副葬の馬具めざめさす冬の雷

剥製の狼に雪降りだしぬ

塩の道ここに途切れて霏々と雪

広島

戸栗 末廣

初笑ひ赤子泣かせてしまひけり

水鏡して一月の望上る

海鳥のこゑきらきらと出初式

山腹に日のよく当る鋤始

島々は光にまみれ初大師

さわがしき鳥がときをり枇杷の花

満潮の音を間近にどんど焼

海鳥の寒きこゑ過ぐ文机

福岡 角野良生

山々の眠りうながす田の煙

赤い実がいつぱい冬の日がいつぱい

チチチチと体温計の鳴る霜夜

ぶつからぬやうに綿虫舞つてをり

鴨の陣浮寝の足は寝てをらず

熱気球冬の田圃にへたり込む

とまり木の一人一人のクリスマス

スリッパにいつか左右や十二月



北九州 児 玉 充 代

寒雷やずしんと山の夜が更くる
山が夜の色となりゆく根深汁
行く年や四方に借りある心地して
除夜の鐘けふがあしたとなるばかり
初茜父母の知らざる世を生きて

太宰府 山 本 則 男

うぶすなの焚火に知らぬ人ばかり
鮫鰯の死んでも水を打たれをり
綿虫の気ままを少し見てをりぬ
象の眼に雲の湧き出す冬日和
遠き日は遠き日のまま龍の玉

糸 田 宮 井 知 英

早々に鶏より奪ふ寒卵
寒鯉捌く神水を存分に
梟を静かな鳥と思ひけり
暮早し石採る山に灯の一つ
花吹雪返信無用の文届く

北九州 河 原 敬 子

いまでも匂ふ縄文の樟冬ぬくし
田遊びや神域に松二本立て
田遊びや藁の大蛇の尾を貰ふ
田遊び果つ干柿の福いただきて
子の姿見えぬ田遊び守り継ぐ

福岡 山内 碧

鈴^{りん}の音の澄みし輪となる寒灯下
寒気まだ張り付く服を吊しけり
雪の中バス根の国を行くごとし
大鰯をぶら下げて行く里の家
頂の一人ひとりに初明り

福岡 矢野 百合子

箒の目しかと立てをり神の留守
良き間合ひ保ち群なす浮寝鳥
枯葦を包んでゐたる日ざしかな
石路咲いて玄海の紺定まりぬ
褒められて脱げなくなりし冬帽子

宮崎 田代 民子

波状岩あらふ黒潮厄おとし
遠洋航海大寒の水脈を引き
着ぶくれて恙遠ざけゐたりけり
凍てゆるむ灯にかざし見る爪のいろ
黒猫の容赦なきくろ年暮るる

岡垣 田中とし江

競走馬の睫毛の砂や十二月
糠雨に杉の香強し初社
どんど焼山河に戻すものばかり
青竹より蒸気たばしるどんど焼
羽根蒲団掛くれば手足伸びにけり

直方 石橋 幾代

歳晚やお茶売る声を赤くして
牛小屋で牛磨かれて初明り
水餅となりしばらくは忘らるる
木の匂ふ材木店の初句会
火の硝子吹けば七色雪しぐれ

福岡 樋口 みのぶ

春風やむかし血を見ぬ時代劇
猫の頭の打たれ撫でられ桃の花
譲り合ふ公園の椅子花ふぶき
潮の香や菜の花を挿す無人駅
葉桜や御堂にもらふ握り飯

大阪 田岡 千章

空つぼのジャングルジムや冬日影
静脈の浮き出る拳寒波来る
粕汁や我に縁なき武勇伝
足少しのべて湯婆浄土かな
ポインセチア硝子なきかに拭き上ぐる

兵庫 青木 朋子

しばらくは頭の中で年用意
段取りのメモに始まる年用意
大杉に触れて身を反るお元日
雑煮餅一つで足らふ身となりぬ
空晴れてこの世の人の賀状受く

福岡 あさなが捷

初めての話のやうに聞く炬燵
立ちしまま座りしままの雛かな
また母に叱られてゐる春のゆめ
歩むほど空の近づく遍路かな
濡縁に湯呑み伏せある遍路宿

東京 山田 正子

枯葦や疲れし水に影おとす
ぼろ市や写真のモンロー束ね売り
抜け道の露地に演歌のやうな雪
一葉の女所帯や縫始
佇めば菜の花畑の黄にめまひ

糸島 小林 朱夏

割り算で分けて余りとなる苺
雛飾る母の背中を支へけり
沼埋めて大明神の花の宴
廃校に残る記念碑初雲雀
声上がる方へ駆け出す磯遊び

太宰府 西住 三恵子

雪のせて沈んでゆきし錦鯉
着ぶくれてコーラス団の口まろし
姿見にまかせ帯結ふ冬うらら
満天星の赤し洞門ただ青し
紅梅や光となりて巫女走る